

ば卷七なる山コエテ遠津ノ濱ノ足代スギテ絲鹿ノ山ノと同格なり(一二九三頁及一三一五頁参照)又上(三〇六九頁)に眞日クレテヨヒナハコナニとあるも此格に屬すべし。さて阿倍は駿河の阿倍にや。もし然らば坂は仙覺のいへる如く宇津谷峠とすべし。○トモシキはメヅラシキなり。ウラヤマシキにあらず。語例は卷七(一二八六頁)に

足柄の管根とびこえゆくたづのともしきみればやまとしおもほゆ

とあり。アスサヘモガモは明日サへ來マセとなり。古義に明日マデモガナ副テアラマホシと譯せるは非なり。もし此譯の如くならばトモシキ君ト又は君ニとあらざるべからず

まをごものふの未ぢかくてあはなへばおきつまがものなげきぞあがする

麻乎其母能布能未知可久氏安波奈敝波於吉都麻可母能奈氣伎曾安我須流

眞小薦は上(三〇七二頁)にもマヲゴモノオヤジ枕ハワハマカジヤモとあり。フは編薦の一節なり。さて第二句を二註の如く字のままにフノミチカクテとよまばフノミまでを序とすべけれどノミといふ辭あまりて聞ゆ。眞淵は未を末の誤としてフノマデカクテとよめり。此説に従ひてフノまでを序とすべし。マデカクテは序よりのかゝりにては各節の狭きにて主文の方にては男女の住處の相近きなり。○アハナヘバは逢ハザレバなり。オキツマガモノは沖ツ眞鴨ノ如クといへるなり。諸註にいへる如く水鳥は水より浮び上りて溜息をつくが故にナゲキに冠せたるなり。水くく野にかものはほのす兒ろがうへにこと於ろはへていまだ宿なふも

水久君野爾可母能波抱能須兒呂我宇倍爾許等於呂波敝而伊麻太宿奈布母

ミクク野は地名なり。ハホノスはハフナスの訛なり。ハフは腹バフなり。ハヒユクにあらず。さて初二は第四句のハヘテにかかれる序なり。古義に「ノスは常には如とい

ふ意にきく例なれどもこゝはただ軽く見べし』といひて卷三(三七三頁)なる雪ジモ
ノユキカヨヒツツを例とせり。實はこゝはナスといふべき處にあらず。ハヘテを起
すに然ははたらかぬ自動詞のハフをつかひたるも心ゆかず。○コト於ロハヘテの
於は誤字なり。諸本に乎とあるに従ふべし。その下の呂は助辭なり。さればコトヲロ
ハヘテは言ヲ延ヘテにて言ヲ通ハシテなり。さてロ又ラは名詞の下に添ふるが常
なるをかくテニヲハの下に添へたるはあやしかれど卷五なる老身重病云々の歌
にも病ヲラ加ヘテアレバとあり。下にも雨ヲマトノス君ヲラマトモとあり。又卷二
十にも子ヲラ妻ヲラとあり。○ネナフモは寢ズモなり。

ぬまふたつかよはとり我栖あがこころふたゆくなもとな與もはりそ
ね

奴麻布多都可欲波等里我栖安我許己呂布多由久奈母等奈與母波里曾
禰

カヨハはカヨフの訛なり。フをハとなまれるはヲロ田ニオフルをオハルといへる

と同例なり。○その下を從來トリガスとよみて鳥ガ巢とせり。此卷に字訓を借りた
るは殆皆正訓なれば書例より見れば從來の説正しきに似たれど修辭の上より見
ればカヨフ鳥ナスとあるべきなり。されば我を能の誤とし栖はしばらくもとのま
まにしてトリノスとよむべし。○フタクナモトは略解にいへる如くフタクラ
ムトの訛なり。フタクの語例は卷四(七九一頁)にウツセミノ代ヤモフタクとあ
り。そはフタバビ來ルと譯すべけれどこゝは二方ニユクと譯すべし。○ナ與モハリ
ソネの與は古義にいへる如く於を誤れるならむ。さてオモハリはオモヒを延べた
るにて下にウサギネラヒをヲサギネラハリといへると同例なり。東語には延約共
に常に異なる事少からず

おきにすもをがものもころやさか杼りいきづく久いもおきてきぬ
かも

於吉爾須毛乎加母乃母己呂也左可杼利伊伎豆久久伊毛乎於伎氏伎努
可母

オキニスモは沖ニ住ムなり。モコロは如クなり。上三〇九三頁にもモコロヲとあり。
○第三句の杼は麻の誤ならむ。第四句の一つの久は贖字なり。キヌルカモをキヌカ
モといへるは古格に従へるなり。○男の旅に出づとてよめるなり

(水づとりの)たたむよそひにいものらにもいはずきにておもひかね
つも

水都等利乃多多武與曾比爾伊母能良爾毛乃伊波受伎爾氏於毛比可禰
都毛

ヨツヒは支度なり。イモノヲは上三〇五五頁なる伊毛奈呂におなじ。なほ云はばイ
モノヲのノはセナ、イモナ、兒ナのナにおなじく又ラは口にひとしき助辭なり。○オ
モヒカネツモは堪へカネツとなり。卷四に

珠衣のさるさるしづみ家の妹にもいはず來ておもひかねつも

卷二十に

みづとりのたちのいそぎに父母にもいはずきにていまぞくやしき

とあり。此外にも似たる歌あり。集中にオモヒカネツモと云へるに此處の如く堪へ
カネツモと譯して可なると然らざるとあり。然らざる例は此卷三〇八二頁なるカ
クレシ君ヲオモヒカネツモ、卷十五なるユカムタドキモオモヒカネツモ、卷十二、二
六四七頁なるヨドマム心オモヒカネツモ、卷二十なるトゴコロモアレハオモヒカ
ネツモなり。終二首は例の心ヲモツといふ意なるココロヲオモフなり

とやの野にをさぎねらはりをさをさもねなへこゆるにははにころば
え

等夜乃野爾乎佐藝禰良波里乎佐乎左毛禰奈敝古由惠爾波伴爾許呂波
要

初二はヲサヲサをいひ起さむ序なり。トヤノ野は地名、ヲサギはウサギの訛、ネラハ
リはネラヒの延なり。○ヲサヲサは俗語のアンマリに當るべし。ネナへはネナフの
訛にて寝ヌなり。上三〇九一頁に解ケヌ紐をトケナヘヒモといへると同例なり。コ
ユエニは子ナルモノヲなり。下にもオトダカシモナネナへ兒ユエニとあり。○結句

はハハニコロバユをコロバエとなまれるか

ネナフをネナへとなまる如くコロバユをコロバエとなまりもすべし

又は俳句川柳に行はるゝ如く

たとへばウキ鴨ヤタハレ男ニ射クヅサレウナサレル盧生杓子デツツツカレな
どいへる如く

終止格にていふべきを轉じて連用格にていへるか。もし然らば歌にはいとめづら
しき例といふべけれどおそらくは前者すなはちコロバユをコロバエとなまれる
なるべし。コロバユは叱ラルなり。ハハといへるは女の母なるべし。上にもナガ母ニ
コラレアハユクとあり

も さをし鹿のふすやくさむら見えずとも兒ろ家かな門よゆかくしえし

毛 左乎思鹿能布須也久草無良見要受等母兒呂家可奈門欲由可久之要思

初二は牡鹿が草村ニ伏シテといへるにて見エズにかゝれる序なり。見エズトモは
兒ロノ姿が見エズトモとなり。家は一本に我とあるに従ふべし。兒ロガカナトヨは
女ノ家ノ門ヲとなり。ユカクシエシモは行クノガ好マシヤとなり。エシはヨシの古
語なり

いもをこそあひみにこしか(まよびきの)よこやまへろのししなす於母

徹流

伊母乎許曾安比美爾許思可麻欲婢吉能與許夜麻徹呂能思之奈須於母

徹流

マヨビキノは横山にかゝれる枕辭なり。へロの口は助辭にてへは邊なり。○於母徹
流は麻母禮流の誤ならざるか。もし然らば猪鹿ヲ監視スル如クイヂワロキ母親ガ
我ヲ監視セルヨといへるなり。仇マモルのマモルなり

も はるの野にくさはむこまのくちやまずあをしぬぶらむいへの兒ろは

波流能野爾久佐波牟古麻能久知夜麻受安乎思努布良武伊敝乃兒呂波母

初二は序、クチャマズは口ヲ休メズといふことにてはやく卷九なる思娘子作歌(一八二七頁)にタマダスキカケヌ時ナク、口ヤマズワガコフル兒ヲとあり○こは旅なる男の家なる妻をしのびてよめるなり

ひとの兒のかなしけしだは(はま渚どり)あなゆむこまのをしけくもなし

比登乃兒乃可奈思家之太波波麻渚杼里安奈由牟古麻能乎之家口母奈思

ヒトノ兒は人の娘にて作者に取りてはしのび妻なり。カナシケはカナシキなり。上(三一〇七頁)にもヒトノ兒ノウラガナシケヲとあり。シダは時なり○ハマスドリはアナユムにかゝれり。海邊の砂地を歩む水鳥は行き悩むが故に枕辭とせるなり。アナユムは足悩ムアナユムの訛なり。ヤをユとなまれるは卷二十にアタヤマヒをアタユマヒ

となまれると同例なり。惡路に駒を驅らば駒をそこなふべけれどそも惜からずといへるなり

あかごまがかとてをしつついでがてにせしを見たてしいへの兒らほも

安可胡麻我可度氏乎思都都伊氏可天爾世之乎見多氏思伊敝能兒良波母

初句はワガ乗ル赤駒ガと心得べし。見タテシは見タタセシにて今もいふ語なり○實は己もいでがてにせしを駒のみにおほせたるがをかしきなり

おのがををおほになおもひそにはにたちゑますがからに古麻コマにあふものを

於能我乎遠於保爾奈於毛比曾爾波爾多知惠麻須我可良爾古麻爾安布毛能乎

古麻はおそらくは古呂の誤ならむ。一首の趣は若き男が馬に乗りて人の垣の外を

過ぎし時庭に立てる若き女がその馬の尾振のをかしきを見てうちゑみしが縁となりて男女ものいひかはす趣にて馬に向ひて

駒ヨ、自分ノ尾ヲ粗末ニ思フナ、別品ガ庭ニ立ツテマヘガ尾ヲ振ルノヲ見テ笑ハシヤツタカラソレガ縁ニナツテカヤウニ別品ト話ヲスルノヂヤモノヲ

といへるなり。駒ヨといふことは歌には略せるにて上(三〇二一頁)なる

にひ田山ねにはつかななわによそりはしなる兒らしあやにかなしも

といへる歌に雲ノといふことを略せると相似たり

あかごまをうちてさをびきこころびきいかなるせなかわがりこむといふ

安加胡麻乎字知氏左乎妣吉己許呂妣吉伊可奈流勢奈可和我理許武等伊布

サヲビキは宣長のいへる如く緒牽にサといふ添辭を加へたるなり。名詞と動詞と相たぐひて一語となれるに添辭を加へたるは異様なれどヤ船タク(一三五三頁)サ

夜ドフ(一六六八頁)ウチ羽ブクなどいへる例あり。さればサヲビクは綱して引くことなり。序はウチテまでなり。されば初二は赤駒ヲウチテヲビクガ如ク我ヲヲビキといへるなり。人ををびくは人を誘ふなり。このヲビクは今もいふ語なり。○ココロビキは心ヲヒキの一語となれるにてこれも誘ふことなり。さてそのココロビキは卷十一(二五二四頁)なるオシテル難波スガ笠オキフルシ又上(二九九七頁)なるウマダタノネロニカスミキと同格にてココロビク事ヨといふ意なり。○右の如くなれば此歌は女が媒に向ひていへるにて

進マヌ赤駒ヲ打チテ緒牽クガ如ク我ヲヲビキ誘フ事ヨ、全體我許ヘカヨヒ來ムトイフハイカナル男ゾ

といへるなり

くべごしにむぎはむこ字まのはつはつにあひ見し兒らしあやにかなしも

或本歌曰うませごしむぎはむこまのはつはつににひはだふ

れしころしかなしも

久[△]徹[△]胡[△]之[△]爾[△]武[△]藝[△]波[△]武[△]古[△]宇[△]馬[△]能[△]波[△]都[△]波[△]都[△]爾[△]安[△]比[△]見[△]之[△]兒[△]良[△]之[△]安[△]夜[△]爾[△]可[△]奈[△]
思[△]母[△]

或本歌曰宇麻勢胡之牟伎波武古麻能波都波都爾仁必波太布
禮思古呂之可奈思母

クベは垣なり。第二句の宇は衍字なり。ハツハツニはチョットなり。初二は序なり。ハ
ツハツニアヒ見シにかゝれるは垣ごしに麥はむ馬は頭のみチョット見ゆればな
り

ウマセも垣なり。今はウを略してマセといひマセ垣ともいふ。はやく卷十一二一六八
五頁にウマセゴシニ麥ハム駒ノラユレドとあり

ひろ[△]波[△]之[△]を[△]う[△]ま[△]こ[△]しか[△]ね[△]て[△]こ[△]こ[△]ろ[△]の[△]み[△]い[△]も[△]が[△]り[△]や[△]り[△]氏[△]和[△]は[△]こ[△]こ[△]に[△]し[△]
て

或本歌發句曰をばやしにこまをはささげ

比呂波之乎宇馬古思我彌氏己許呂能未伊母我理夜里氏和波己許爾思
天

或本歌發句曰乎波夜之爾古麻乎波左佐氣

馬越シカネテとあれば狭き橋なるべきを比呂波之といへる不審なり。されば契沖
は尋橋か又は古橋かといひ眞淵は一枚橋なりといひ宣長はいは橋の間々の廣き
をいふかといひ雅澄は翻橋にてそり橋なりといへり。案するに比呂波之は比呂湍
呂の誤ならむ。下の呂は助辭なり。○第四句は宣長の説にイモガリヤリツの誤なる
べしといへり。追などを誤れるならむ。○結句の和はココロに對して身といふべき
なり(但誤字にはあらじ)卷十五にも

あがみ[△]こそ[△]せき[△]山[△]こ[△]えて[△]こ[△]こ[△]に[△]あ[△]ら[△]め[△]心[△]は[△]妹[△]に[△]よ[△]り[△]に[△]し[△]も[△]の[△]を[△]
とあり

或本歌のハササケは古義にハサセアゲの約とせり。ハサセは次に駒ヲハサセテと
ありて今ハセといふにおなじ。もしハセアゲの義ならば茂き林に駒をのり入れて

進退共に難き趣なるべし

あずのうへにこまをつなぎてあやほかどひと麻都^{マツ}ころをいきに△わがする

安受乃宇徹爾古馬乎都奈伎氏安夜抱可等比登麻都古呂乎伊吉爾和我須流

アズは田中道麻呂の説に

字鏡に珥崩岸也久豆禮又阿須とある是也俗に云がけの危き所也

といへり。アヤホカドはアヤフケド(危カレド)の訛なり。麻都は契沖のいへる如く都麻の顛倒なり。ヒトヅマコロヲは人ノ妻ナル子等ヲなり。○イキニワガスルは息ノ緒ニワガ思フといふにひとしからむ。卷十九なる家持の

白雪のふりしく山をこえゆかむ君をばもとないきのをにもふ

といふ歌の左註に

左大臣換尾云いきのをにする。然猶喻曰。如前誦之也。^{ヘヨト}

とあり。なは云はばイキノヲもイキも共に命といふことならむ。さて爾の下におそらくは曾をおとせるならむ。○初二は序なり。危キガ如ク危カレドといへるなり。卷十二(二六九四頁)に

いきのをにわがいきづきし妹すらを人妻なりときけばかなしも

とあり

さわたりの手兒にいゆきあひあかごまがあがきをはやみことどはずきぬ

左和多里能手兒爾伊由伎安比安可故麻我安我伎乎波夜美許等登波受伎奴

澤渡は諸國にある地名なり。こゝなるは上野國のならむか。手兒は小女の愛稱なり。

第三句はイユキアヒシヲと辭を加へて聞くべし

あずべからこまのゆこのすあやはどもひとづまころを麻由可西良布母

安受倍可良古麻乃由胡能須安也波刀文比登豆腐古呂乎麻由可西良布母

アズベカラは崖ノ邊ヲなり。ユコノスは行クナスなり。○アヤハドモはアヤフカドモ(危カレドモ)をつづめたるにてシヅマリをシヅミ、ナカスルをナクル、コロバレをコレといへる類なり。かく甚しく語をつづむる事は東語に限れりやといふに古事記に浮島アリソレニ立タシテをウキジマリソリタタシテといひ(二三三五頁參照)須佐之男、尊の御歌にイヅル雲をイヅモとのたまひ(イヅル雲の古格はイヅ雲なるをつづめてイヅモとのたまへるなり)佛足石歌にソナハレル、ノコセル、メヅラシをソダレル、ノケル、メダシといひ(卷十二附錄參照)姓の車持をクラモチとよめるなどを思へば京語にても甚しく語をつづむる事は行はれしなり。されど然甚しくつづめたる語はみやびたらずうるはしからねば京人は歌にはをさをさつかはざりしを

素尊の御歌はいと古かれば別とすべし。卷二十なる元正天皇の御製にモトツ人カケツツモトナアヲネシナクモとよませたまへると佛足石歌なるとは異例な

り

東人は多くはことばえりなどをせざれば常談にいふがまゝに歌にもつかひしなり。辭を換へて云はば當時はやく語に雅俗の別ありて甚しくつづめたる語の如きは俗語に屬せしなり。○此歌は二首前なるとも一つの歌なりけむ。麻由可西良布母はいまだ考へず。或は伊企耳[△]四毛[△]布母[△]などを誤れるか

さざれいしにこまをはさせてこころいたみあがもふいもがいへのあたりかも

佐射禮伊思爾古馬乎波佐世氏己許呂伊多美安我毛布伊毛我伊敞乃安多里可聞

ハサセテは契沖のいへる如く令馳而にてやがて馳セテなり。陸中などの方言には今もハシラスルをハサセルといふといふ。かくハサセテといへるによりてハスはいにしへ四段にはたらきし事を知るべし(一四七七頁參照)。さて初二は心イタミアガモフにかゝれる序なり。心イタミアガモフはアガ心イタミオモフにてそのイタ

ミはイタガリなり○遠く妹が家のあたりを眺めてよめるにて妹が家ハアノ邊カ
といへるなり。ココカといへるにあらず

(むろがやの)つるのつつみのなりぬがにころはいへどもいまだねなく
に

武路我夜乃都留能都追美乃那利奴賀爾古呂波伊敞杼母伊末太年那久
爾

古義にいへる如くツルは甲斐國の都留にて枕辭は群萱ウヅノ之列といひかけたるにこ
そ○初二は序にて池又は川の堤の成るを事成ルにいひかけたるなり○ナリヌガ
ニはアエヌガニ、ケヌガニなどと同例にて事成ルバカリニとなり。ナルの例は上三
○九八頁にナリモナラズモナトフタリネモとあり○イマダネナクニはマダ相寐
セザル事ヨとなり

(あすかがは)したにござれるをしらずしてせななとふた理さ宿ネてくやし
も

阿須可河泊之多爾其禮留乎之良受思天勢奈那登布多理左宿而久也思
母

名高きアスカ川は大和にこそあれ。されば眞淵はアス太ガハ(更科日記に見えたる)
の誤とし、雅澄は東國の女が京に上りてよめるなりとせり。案ずるに東國にもアス
カ川といふ川あるまじきにもあらず。否アスカガハは足利川にて今の渡瀬川ワタセにあ
らざるか。さて此句はシタニゴレルにかゝれる枕辭なり。二三は男ノ心ノウハベノ
ミ清キヲ知ラズシテといへるなり○セナナはセナノとおなじくセナネを訛れる
なり(三〇一三頁参照)○第四句のフタリといふ語無用なり。

上(三〇九八頁)なるナリモナラズモナトフタリネモのフタリは必用なり。味はひ
分くべし

おそらくはフタ欲の誤ならむ○六帖第三帖に

とね川は底はにごりてうはずみてありけるものをさねてくやし
とあると相似たり

(あすかがは)せくとしりせばあまたよもるねてこましをせくとしりせ

ば

安須可河泊世久登之里世波安麻多欲母爲禰氏己麻思乎世久得四里世波

初句は枕辭第二句はカク親ノセクト知ラバとなり。キネテはツレユキテ寢テなり。はやく上三〇〇二頁に見えたり

あをや木のはらろかはとになをまつとせみどはくまずたちどならず

安乎楊木能波良路可波刀爾奈乎麻都等西美度波久末受多知度奈良須母

ハラロは契沖のいへる如くハレルの訛にて芽ヲ張レルなり。上三〇七七頁にコヨヒトノレルをノラロといへると同例なり。古義に地名とせるはいみじきひが言なり。上三〇五三頁にもアヲヤギノハリテタレバモノモヒデツモとあり。四五も契沖のいへる如く清水ハ波マズ立所平スモなり。タチドナラスはタタズムといは

むにひとし

あぢのすむ須沙のいり江のこもり沼のあないきづかしみずひさにして

阿知乃須牟須沙能伊利江乃許母理沼乃安奈伊伎豆加思美受比佐爾指天

上三句は序なり。初二の語例は卷十一(二四八一頁)にアデノスムスサノ入江ノアリソ松とあり。又三四の語例は卷七(一四四七頁)にミゴモリニイキヅキアマリ、卷八(二五一〇頁)に雲ゴモリアナイキヅカシアヒワカレユケバとあり。コモリ沼ノは無論イキヅカシにかかれるなり。古義に見ズにかゝれりとせるは非なり。葦菰などにうづもれたる沼は息ぐるしければコモリヌノイキヅカシとかゝれるなり。〇ミズヒサニシテは見ザル事久シクシテとなり。見ザルといはで見ズといへるは古格に従へるなり

なるせろに木つ能よすなすいとのきてかなしけせろにひとさへよす

も
奈流世呂爾木都能余須奈須伊等能伎提可奈思家世呂爾比等佐敝余須母

ナルセロの口は助辭、ナルセはたぎち騒ぐ瀬なり。契沖雅澄の地名とせるは非なり。○契沖以下木都能をコツミノ意としたれどコツミを略してコツとはいふべからず。古義に或説に能を彌の誤とせるを引きたり。此説に従ふべし。コツミは樹の芥なり(二四六三頁参照)○初二は結句のヨスにかゝれる序なり○イトノキテははやく卷五にイトノキテイタキ瘡ニハ、卷十二にイトノキテウスキ眉根ヲとあり。甚シクといふことなり。カナシケはカナシキの訛なり。ヨスはトリ持ツなり(二九九八頁参照)

たゆひがたしほみちわたるいづ△ゆかもかなしきせろがわがりかよはむ

多由比我多志保彌知和多流伊豆由可母加奈之伎世呂我和賀利可欲波

牟

第三句は久の字をおとせるにてイヅクユカモなるべし。否モは衍字にてもあるべし。イヅコヲトホリテカとなり

於志^キ氏伊^イ奈^ナ等^トい^イね^ネは^ハつ^ツか^カね^ネど^トな^ナみ^ミの^ノほ^ホの^ノい^イた^タぶ^ブら^ラし^シも^モよ^ヨき^キそ^ソひ^ヒと^トり^リ
宿^トて

於志氏伊奈等伊禰波都可禰杼奈美乃保能伊多夫良思毛與伎曾比登里宿而

ナミノホノは枕辭なり。イタブラシの例は卷十一(二四七〇頁)に

風をいたみいたぶる浪のあひだなくわがもふ妹はあひもふらむか

とあり。さればイタブラシはフラフラスルとなり。第二句以下は稻ヲ春カバコソイタブラシカルベケレ稻ハ春カネド云々といへるならむ。上にイネツケバカカルアガ手ヲとありて稻つくは女の業なり。獄令に婦人配^{アテ}縫作及春とあり。大炊寮式に春米女丁とあり。播磨風土記に春米女、靈異記に稻春女とあり。○キソはこゝにては昨

夜なり。さてキノヒトリネテはこゝにては男ヲマチ明シテといふ意なるべし。○初句は於吉氏伊末等の誤か。さらばイマドはイマダをなまれるにて起キ出デテマダといへるなり

あぢかまのかたにさくなみひら湍に母ひもとくものかかなしけをおきて

阿遅可麻能可多爾左久奈美比良湍爾母比毛登久毛能可加奈思家乎於吉氏

アヂカマは卷十一(二四七六頁)に味鎌ノ塩津ヲサシテコダ船ノとあると同處にや。次にもアヂカマノカケノミナトニイルシホノとあり。○サクナミといへるは浪の穂の白く開くるを花によそへてサクといふなり(さればナミノ花ともいへり)。語例は卷六(一〇四一頁)にシラナミノイサキメグレルスミノエノ濱また卷二十に

今かはるにひさきもりがふなでするうなばらのうへになみなさきそねとあり。○ヒラ湍は波たたで穩なる川瀬なり。卷十九にはシクラ河ナツサヒノボリ、

平瀬ニハサデサシワタシ、早湍ニハ水鳥ヲカヅケツツとありて早瀬にむかへもちひたり。ヒラセニ母の母は波の誤ならむ。○上三句はヒモトクモノカにかゝれる異常なる序なり。ヒモトクは序よりのかゝりにてはサクといふにおなじ。古今集なるモモ草ノ花ノヒモトク秋ノ野ニのヒモトクなり。○カナシケはカナシキにてカハユキ人なり。上にもソノカナシキヲ外ニタテメヤモ、カナシキガ駒ハタダトモワハソトモハジなどあり。主文の意はカハユキ男ヲオキテアダシ男ト相寝ムヤハといへるなり。トクモノカは解カムモノカハと心得べし

まつがうらにさわゑ宇らだちまひとごと△おもほすなもろわがもほのすも

麻都我宇良爾佐和惠宇良太知麻比等其等於毛抱須奈母呂和賀母抱乃須毛

マツガウラは地名なり。オモホスナモはオモホスラムなり。上にコヒシカルラム、フタクラムトをコフシカルナモ、フタクラムトといひ下にワカマツラムをワ

ヲカマツナモといへるに同じ。口は助辭なり。さればオモホスナモロはオモホスラ
 ムヨといはむにひとし。○ワガモホノスモはワガモフナスモにてワガ思フ如クと
 いふことなり。上にも鴨ノハフナスをカモノハホノスといへり。○二三心得がたし
 古義には第二句の宇を牟の誤として驟群立といふかといへり。されどサワギを打
 任せてサワエとはいふべからず。案するに卷四(六三〇頁)にサ藍^サ謂^サシヅミといへ
 るを上(三〇八八頁)にサ惠サ惠シヅミといへり。そのサエはサキをなまれるなれば
 こゝのサワエもサワキをなまれるなり。さて潮の騒ぐことをシホサキといへり。サ
 キサキのサキはやがてシホサキのサキなるがもとサワギをつづめたるものとも
 思はれず。然るにこゝにサワキ(なまりてサワエ)とあるを思へばサワグはいにしへ
 サワウといひしにてここにはそのサワウをはたらかしてサワキ(なまりてサワエ
 といへるなるべく又サキサキ、シホサキのサキはサワキをつづめたるものなるべ
 し。宇良太知の宇はげに牟の誤なるべし。○マヒトコトは今一言のイを略せるなる
 べし。イを略せる例はイモガ家ニ、モノイハズキニテをイモガヘニ、モノハズケニテ
 といへるなど集中に少からず。もし然らば今の世に今一ツ、今スコシなどをマ一ツ、

マスコシなどいふははやく奈良朝時代に行はれしなり。さて麻比等其等の下に重
 點(々)をおとせるにてもとマヒトゴトといふ六言なりけむ。○此歌は旅だつ人の
 作れるにて船出セシ松ガ浦ニ家人ナドノサワギ群立チテ今一言ヲト我ト同ジク
 思フラムといへるならむ

あぢかまのかけの水なとに⁺いるしほのこて多⁺すくもが⁺いりてねまく

も

安治可麻能可家能水奈刀爾伊流思保乃許氏多受久毛可伊里氏禰麻久

母

アヂカマノカケノミナトは湊の名なり。○コテはコトの訛にて如なり。如を次の句
 の頭におきたる例は卷八にナク鹿ノ、コトトモシカモ、卷十にウグヒスノ、コトサキ
 ダチテ、卷十一にユク水ノ、コトカヘラズゾとあり(二二八四頁参照)。そのコは清みて
 唱ふべき事はやく云へる如し。又コトをコテとなまれるは卷二十にサクアレトを
 サクアレ天といへると同例なり。○多受久毛可の多は夜の誤ならむ。されば第四句

はコトヤスクモガにて如ヤスクモガナ、ソノ如クヤスカレカシといふ意なり。受を清音の스에借れるは上(三〇五九頁)にもヲグサスケヲの受と書けり。○結句のネマクモはネムをネマクと延べ、それにモを添へたるにてサラバ妹ノ小床ニ入りテ寢ムヲといへるなり

いもがぬるとこのあたりにいはぐる水づにもがもよいりてねまくも

伊毛我奴流等許乃安多理爾伊波具久留水都爾母我毛與伊里氏禰末久母

略解に

潜ルは古く清音にて唱へたりと見ゆ。されば岩グクルと上よりいひ下す故に上を濁れり。具久は久具の下上になれる也とおもふはかへりて非也。谷具久など同じ例也

といへる如し(一五三八頁タチクク参照)○古義にいへる如く

いはぐる水にもがもよ妹がぬる床のあたりに入りてねまくも

と句をおきかへて心得べし

まくらがのこがのわたりのからかぢのおとだかしもなね莫へ兒ゆるに

麻久良我乃許我能和多利乃可良加治乃於登太可思母奈宿莫徹兒由惠爾

マクラガもコガも共に地名なり。上(三〇五八頁)にもマクラガヨアマコギク見ユナミタツナユメとあり。次にもマクラガノコガゴグ舟ニとあり。コガは今の下總國古河なり。ワタリは渡津なり。○カラカヂは支那風即新式の楫なり。柄楫カサネにあらず。上三句はオトにかゝれる序なり。○オトは噂なり。モナは共に助辭なり。ネナへはネナフを訛れるにてネナフは寢ヌなり。兒ユエニは女ナルモノヲとなり。上(三一三一頁)にもネナヘコユエニ母ニコロバエとあり。○卷十一(二四六七頁)に

きの海の名高の浦による浪の音たかきかもあはぬ子故に

とあるに似たり

しほぶねのおかればかなしき宿つればひとごとしげしなをどかもしむ

思保夫禰能於可禮婆可奈之左宿都禮婆比登其等思氣志那乎杼可母思武

初句はシホ船ノヤウニといへるにて枕辭なり。シホブネは上三〇五九頁にシホブネノナラベテミレバヲグサヲカチケリとあり。第二句以下は宣長の

オカレバはオケレバ也。女ヲキネズシテオケレバなり。船にはオクといふ事似つかはしからねど乗らずして浦にいたづらに置てある舟を見てそれによそへてよめるなるべし。、、さてナヲドカモシムは汝ヲアドカモセムにてアを略ける也

といへる如し。但女ヲキネズシテといへるはネズシテ女ヲなど改むべし。キネはただ相寝る事にあらず。屋外に又は家のうちならば一室につれゆきて相寝る事なれ

ばなり。○アドカモのアを略せるは少くとも當時の雅言には例なき事なり。古言俗言にはありもすべし。さてアドカモは何トカモなり

なやましけひとづまかもよ(こぐふねの)わすれはせなないやもひます

爾

奈夜麻思家比登都麻可母與許具布禰能和須禮婆勢奈那伊夜母比麻須爾

ナヤマシケはナヤマシキなり。コグフネノのかゝりたどたどし。おそらくはイヤにかゝれるならむ。宣長雅澄は四五三一二とついでて心得べしと云へれど然妄に句をついづべけむや。○セナナはセズシテなり。上にも

にひ田山ねにはつかかななわによそりはしなる見らしあやにかなしも(三〇二二頁)

しらとほ布をにひた山のもる山のうらがれせななとこはにもがも(三〇四六頁)などあり。○結句の爾は毛の誤にあらざるか。卷十八に

わがせこが琴とるなべにつね人のいふなげきしもいやしきますも
とあり

あはずしてゆかばをしけむまくらがのこがこぐふねにきみもあはぬ
かも

安波受之氏由加婆乎思家牟麻久良我能許賀己具布禰爾伎美毛安波奴
可毛

しのびたる人に別を告ぐる事も得せずして旅立たむとする人のよめるなり。フネ
ニは舟ニテなり。アハヌカモは逢ヘカシなり。コガコグフネといへるは渡舟なるべ
し。上にもマクラガノコガノワタリとあり。ワタリは渡津なり。○男の歌なり。考略解
に女の歌とせるはキミとあるに泥めるにや

おほぶねをへゆもともゆもかためてし許曾のさとびと△あらはさめ
かも

於保夫禰乎倍由毛登毛由毛可多米提之許曾能左刀妣等阿良波左米可

母

初二は序にて宣長のいへる如く大船ヲツナグニ舳ヨリモ艦ヨリモ固ムル如ク口
ヲ固メテシといへるなり。○從來許曾能左刀妣等の七言を第四句とし二註に許曾
は地名かといへり。許は呼などの誤にて上に附くべく、等の下に能のおちたるなら
む。さらば三四はカタメテシヲ、ソノサトビトノとよむべし。アラハサメカモは漏サ
ムヤハなり

まがねふくにふのまそほのいろにていはなくのみぞあがこふらく
は

麻可禰布久爾布能麻曾保乃伊呂爾低氏伊波奈久能未曾安我古布良久
波

初二は序にてマガネフクは准枕辭なり。マガネは金屬の總稱にてこゝにては水銀
ならむ。フクは分析するなり。○ニフは丹すなはち丹砂を産するによりて負へる地
名なり。諸國にある地名なれどこゝは上野國甘樂郡カムラのなるべし。マソホはやがて丹

なり○結句の下に並々ナラズなどいふことを略したるなり。ワガコフラクハイハ
ナクノミヅとかへるにはあらず

かなと田をあらがき麻由美ひがとればあめをまとのすきみを等まとも

可奈刀田乎安良我伎麻由美比賀刀禮婆阿米乎萬刀能須伎美乎等麻刀
母

カナト田は門田なり。麻由美を眞淵は

由美は可幾の字なるべし。田は春より馬鋤てふものしてかきならすを荒ガキと
いひ次に苗を植る時するをコナガキとも眞ガキともいへり

といへり。案ずるにマユミは眞忌の訛なり。實は荒ガキ眞ガキ、荒イミ眞イミといふ
べきを略してアラガキマユミといへるにて荒搔に眞搔をこめ荒忌を眞忌に譲れ
るなり(アラは粗なり豫なり假なり。マは精なり本なり眞なり)。さればアラガキマユ
ミは田ヲ搔キ又清メテと譯すべし。但マユミは名詞なれば語格上には其下にシテ

を略せるものと認むべし。シテを略せるは朝開シテ漕ギイニシ舟といふべきをア
サビラキコギニシ舟といへると同例なり○三四は前註にいへる如く日ガ照レバ
雨ヲ待ツナスをなまれるなり○等を考略解にラとよみたれど此卷には等は皆ト
に借りてラに借れる例なし。おそらくは良とあるべきを書き誤り又は寫し誤れる
ならむ。さてテニヲハのヲの下にラを添へたるは卷五(九八五頁)に病ヲラ加ヘテア
レバ、上(三一二七頁)に言ヲロハヘテ、卷二十に子ヲラ妻ヲラとあり(このコヲラツマ
ヲラは古乎等[△]都麻乎等[△]と書けり)○マトモは待ツモなる事前註にいへる如し
ありそ夜[△]におふるたまものうちなびきひとりや宿[△]らむあをまぢかね
て

安里蘇夜爾於布流多麻母乃宇知奈婢伎比登里夜宿良牟安乎麻知可禰
氏

夜を雅澄は敵の誤とせり。美の誤ならむ。卷二(三一七頁)にアリソ回ニイホリテミレ
バ、卷十二(二二七一二頁)にアリソ回ニワガコロモデハヌレニケルカモとあり○初二

は序

比多我多のいそのわかめのたちみだえわをかまつなもきそもこよひ

母 比多我多能伊蘇乃和可米乃多知美多要和乎可麻都那毛伎曾毛己余必

ヒタガタは地名とおぼゆ。初二は序なり。ミダエは亂レの訛なり。タチは添辭なり。マツナモは待ツラムなり。○上(三一―一二頁)にもコヒテカヌラムキノモコヨヒモとあ

こすげろのうらふくかぜのあどすすかかなしけ兒ろをおもひすごさ
む

古須氣呂乃宇良布久可是能安騰須酒香可奈之家兒呂乎於毛比須吾左
牟

コスゲロの口は助辭。コスゲノ浦は今の東京市外の小菅か。初二は結句のスコサム

にかゝれる序なり。○アドススカは古義にいへる如く何トシツツカとなり。○スコサムはスコサムの訛なり。當時京語にてはいまだスコスといはぬを後には一般にいふやうになりしなり。オモヒスコサムは忘レムといふ意なり

かのころと宿^ナ屋^ヤなりなむ(はだすすき)宇良野のやまにつくかたよる
も

可能古呂等宿受屋奈里奈牟波太須酒伎宇良野乃夜麻爾都久可多與留
母

カノコロトはカノ兒トなり。屋は一本に夜とあり。それに従ふべし。正訓ならでは字訓を借らぬが此卷の書例なればなり。ネズヤナリナムは寢ズニシマフカモ知レスといへるなり。○第三句を契沖以下ハダススキ末とつづけるなりといへり。案ずるに天ノ原ニ聳ユル富士ノ柴山をアマノハラフジノシバヤマといひ(二九六八頁)百ツ島ヲツタヒ行ク足柄小舟をモモツシマアシガラヲブネといひ(二九八三頁)鈴ガ音ノトヨム早馬をスズガネノハユマウマヤといへる(三〇四九頁)類にてハダスス

キノ茂レルウラ野ノ山といふべきをシゲレルを略して准枕辭とせるなり。此格は京人の歌にも無きにあらねど東歌には特に多し。ウラ野は古義に信濃國ササガタ小縣郡なる浦野ならむと云へり。げに然るべし。ツクカタヨルモは月傾クモなり。○古義に

此は男の妹がもとへ行て屋外に立て、をりよくば内に入むと伺ひ居るほど夜ふけ月かたぶくを見てよめるなるべし

といへるはカノ兒△ロトといへるにかなはず、屋外の山野にて出で逢はむと契りて女を待ちかねたる趣なり

わぎもここにあがこひしなば曾△和△徹△かも加米△におほせむころしらず

和伎毛古爾安我古非思奈婆曾和徹可毛加米爾於保世牟己許呂思良受氏

ワギモコニを受けたるはアガコヒまでなり。されば正しくはアガコヒテシナバとテを挿みていふべし。○曾和徹を古義に曾故遠の誤ならむといへり。げに然るべし。

ソコヲはソレヲなり。○加米は加未を誤れるにてもあるべく神をなまれるにてもあるべし。三四は我死ニシ事ヲ神ノ御シワザニヨソヘムとなり。ココロは事の心にて事情なり。○伊勢物語に

人しれずわれこひしなばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ

とあると相似たり

防人歌

おきていかばいもはまがなしもちてゆくあづさのゆみのゆづかにも

がも
於伎氏伊可婆伊毛婆摩可奈之母知氏由久安都佐能由美乃由都可爾母我毛

もし古義の如くマガナシを悲シの意とせば妹ハといはで我ハといはざるべからず。さればこのマガナシもマガナシミサネニワハユク、マガナシミスレバコトニヅ

などと同じくカハユシといふ意とすべし。さて常法ならばマガナシカラムといふべきをマガナシといへるは古格に従へるなり

おくれるてこひばくるしもあさがりのきみがゆみにもならましものを

於久禮爲氏古非波久流思母安佐我里能伎美我由美爾母柰良麻思物能乎

右二首問答

第二句はコヒバ苦シカラムといふべきを現在格にていへるなり。○防人に出で立たむとする夫に答ふる歌にアサガリノ君ガ弓ニモといへるうたてなれど、こは君ガ平生朝獵ニツカヒタマフ弓といふ意と見べし

さきもりにたちしあさけのかなとてに手ばなれをしみなきし兒らほも

佐伎母理爾多知之安佐氣乃可奈刀低爾手婆奈禮乎思美奈吉思兒良婆

母

タバナレは分手なり。タは添辭にあらず。卷十七なる思放逸鷹歌にも手放モヲチモ可ヤスキとあり

あしの葉にゆふざりたちてかもが鳴のさむきゆふべしなをばしぬばむ

安之能葉爾由布宜利多知氏可母我鳴乃左牟伎由布敝思奈乎波思奴波牟

いとめでたし。はやく眞淵も「東にもかくよむ人もありけり」とたゝへたり

おのづまをひとのさとおきおほほしく見つつぞきぬるこのみちのあひだ

於能豆麻乎比登乃左刀爾於吉於保保思久見都都會伎奴流許能美知乃安比太

ヒトノサトは己ガ住マヌ里といふ意なるべし。見都都會とある穩ならず。思都都會

の誤かとも思へど此卷の書法にかなはざるをいかがせむ

譬喩歌

あどもへか阿自久麻やまのゆづるはのふふまるときにかぜふかずか
も

安杼毛敞可阿自久麻夜末乃由豆流波乃布敷麻留等伎爾可是布可受可
母

アドモヘカは何ト思ヘバカにて其下にサハ言フなどいふことを略したるなり。阿
自久麻山は常陸國にあるか。○フメルトキは葉のいまだ開けざる時なり。カゼフ
カズカモは風吹カザルカモを古格によりていへるにて風吹カザラムヤハといふ
意なり。○こは女ノマダ童ナルニ言フ通ハセバトテ何カハ咎ムベキといふことを
譬へたるなり

(あしひきの)やまかづらかけましばにもえがたきかげをおきやからさ

む

安之比奇能夜麻可都良加氣麻之波爾母衣可多伎可氣乎於吉夜可良佐

武

ヤマカヅラカゲもカゲも共に日蔭のかづらなる事眞淵のいへる如し。マシバニモ
得ガタキ山カヅラカゲヲといふことを四句にしらべなしたるなり。○マシバニモ
は上三〇九五頁に

おふしもと許乃もとやまのましばにもぬいもが名かたにいでむかも
とありてシバシバモといふ事なり。○結句の語例は卷十二〇八六頁に
しら露のおかまくをしみ秋はぎをりのみをりておきやからさむ
とあり得がたき女を得ながら逢ふをりなきをたとへたるなり

をさとなるはなたちばなをひきよぢてをらむとすれどうらわかみこ
そ

乎佐刀奈流波奈多知波奈乎比伎余知氏乎良無登須禮杼宇良和可美許

曾

ヲサトは小里にて小は添辭なり。卷十九にもツガオホキミ、シキマセバカモ、タヌシキ小里とあり。さてこゝは野に對して里といへるなり。○ヒキヨヂテは引寄せテなり。ウラワカミコソの下に得折ラザレといふことを省きたるなり。○譬へたる意明なり。

みやじろの緒ス可ヘ徹ヘにたてるかほがはな莫ナさきいでそねこめてしぬばむ

武 美夜自呂乃緒可徹爾多氏流可保我波奈莫佐吉伊低曾禰許米氏思努波

岡邊のヲに緒の字を借れりとするは此卷の書法にかなはず。一本に渚とあり又一本に須とあり。もと渚乃徹とありしを誤れるならむ。○可保我波奈を契沖以下カホ花の事としたれどガを挿めるは例なき上にカホ花すなはちヒルガホとしてはタテルといへる。ふさはしからず。されば外の草木にあらざるか。○上四句は女に對し

ていへるにて様子ニアラハスナといふべきを譬へたるなり。結句はカタミニ心ニコメテ忍ビ隠サムといへるなり

なはしろのこなぎがはなをきぬにすりなるるまにまにあぜかかなしけ

家 奈波之呂乃古奈伎我波奈乎伎奴爾須里奈流留麻爾末仁安是可加奈思

コナギは上(三〇二八頁)にウエコナギとある物なり。上三句は序なり。三四の間にソノ衣ノといふことを補ひて聞くべし。こゝのカナシケ(カナシキの訛)はカハユキなり。されば結句はナドカカクカハユキと譯すべし。古義に悲シキの意として「何ヲアカズ思ヒテカヤウニ悲シキ事ゾとあやしめるなり」といへるは従はれず

挽歌

かなしいもをいづちゆかめと(やますげの)そがひに宿ホしくいましくや

しも

可奈思伊毛乎伊都知由可米等夜麻須氣乃曾我比爾宿思久伊麻之久夜
思母

以前歌詞未得勘知國土山川之名也

卷七(一四七〇頁)なる

吾背子をいづくゆかめとさき竹のそがひにねしく今しくやしも
を作り更へたるならむ○カナシイモヲといへるはユカメトの下に思ヒテを略し
たるなればなり。ユカメトは行カムトを轉じたるなり○ヤマスゲノは菅の末の相
分れたるが男女の背合せに寝たるに似たればソガヒニネシクの枕とせるなり。ネ
シクは寢タ事ガとなり。いにしへ行はれし一格なり。近くは卷八(一六〇一頁)及卷十
(二〇六九頁及二〇九六頁)に例あり

(大正十三年九月講了)

萬葉集卷第十四轉訛例一斑

凡例

せろ、妹ろ、兒ろ、ねろナドらヲろトナマレルハ極メテ多クシテ人ノ看過セム恐
ナケレバ舉ゲズ
あせか、あどか、のす、せもナド類多キモノハ其一二ノミヲ舉ゲツ
字ノ左ニ△ヲ附セルハ誤字トオボユルヲ改メテヨメルナリ

同行轉訛例

あ	いとナマレル	二九八頁
あしが利の	………	二九八頁
あ	うトナマレル	………
奴がなへゆけば	………	三〇八二
あな由むこまの	………	三二三四

あ えトナマレル

わはさかるか倍……………三〇三二
しひのこや提の……………三〇九九

あ おトナマレル

なみにあふ能す……………三〇二六
こなら能す……………三〇三五
たかだか母たむ……………同

あしとひ登ごひ……………三〇五五

あは乃へしだも……………三〇八四

い うトナマレル

ま都したす……………二九七九
ねろにつ久たし……………三〇〇六
たつ努じの……………三〇二七
をかのく君みら……………三〇五四

あぬ弩ゆかむと……………三〇五六

あぬ努はゆかすて……………同

い久づくまでに……………三〇六七

に布なみに……………三〇六八

たとつ久の……………三〇八二

こ布しかるなも……………同

あらがきま由み……………三一六〇

い えトナマレル

を氏もこのものに……………二九七六

かなし家こらに……………三〇二五

すそのうちか倍……………三〇八九

うらがなし家を……………三一〇七

西みどはくまず……………三一四六

か米におほせむ……………三一六四

い おトナマレル

於しべにおふる	二九七三
ままの於すびに	二九九九
ここば故がたに	三〇四〇
よし呂きまさぬ	三〇七七
こ等たかりつも	三〇八九
う あトナマレル	
よ良のやまべの	三〇九六
をろたにお波る	三一〇八
かよ波とりのす	三一二八
う いトナマレル	
爾ぬほさるかも	二九六二
しりひか志もよ	三〇四〇
比じにつくまで	三〇五七

爾ぬぐもの

う えトナマレル

あはの敵しだも	三〇八四
とけな敵ひもの	三〇九一
ねな敵こゆゑに	三二三一
ははにころば要	同
いづちゆか米と	三二七一
う おトナマレル	
すがのあら能に	二九六三
よにもた欲らに	二九八四
かみつけ乃	三〇一七
あらは路までも	三〇二七
いまはいかにせ母	三〇三〇
ふ路よきの	三〇三四

ふろ興きの 三〇三四

ひ古ふねの 三〇四〇

わは[△]かつさね母 三〇四二

こよひとのら路 三〇七七

かりてきなは母 三〇七九

ね毛とかころが 三〇八〇

た刀つくの 三〇八二

こふしかるな母 同

あ抱⁺したも 三〇八四

あ路こそえきも 三一一五

かものは抱[△]のす 三一二七

おきにす母 三一二九

乎さぎねらはり 三二三一

あや抱かど 三二四〇

はら路かほとに 三二四六

せみ度はくまず 同

あめをま刀のす 三二六〇

きみをらま刀も 同

おもひす吾さむ 三二六二

え あトナマレル

ゆきかもふ良る 二九六二

にぬほ佐るかも 同

くにのとほ可ば 二九九七

まさかしよ加ば 三〇二三

ここばこが多に 三〇四〇

つらは可めかも 三〇四七

こよひとの良ろ 三〇七七

とほ可ども 三〇八〇

しげ可くに 三〇九六

しひのこ夜での 三〇九九

あやほ可ど 三一四〇

は良ろかはとに 三一四六

お可ればかなし 三一五六

え イトナマレル

ふじのやま備に 二九七〇

ままのおす比に 二九九九

いでそたばり爾 三〇五〇

おひばおふるが爾 三〇六二

にふな未に 三〇六八

いもがな藝かむ 三〇八一

なをどかも思む 三一五六

え おトナマレル

欲だちきぬかも 三〇八七

ひが刀れば 三一六〇

お あトナマレル

つきよ良しもよ 三〇四五

かたりよ良しも 三〇五五

なにこそよ佐れ 三〇八四

お イトナマレル

お思べにおふる 二九七三

みだれ志めめや 二九七四

よ斯ろきまさぬ 三〇七七

お うトナマレル

に努ほさるかも 二九六二

久もりぬの 二九八六

ままのお須びに 二九九九

に努ぐもの 三二一九
 お えトナマレル
 西らしめきなば 三〇四七

同列轉訛例

う むトナマレル
 かき武だき 三〇一五
 武らなへに 三〇三〇
 す つトナマレル
 うちびさ都 三二一二
 ぞ どトナマレル？
 ひと登おたばふ 三〇二二
 そらゆ登きぬよ 三〇三五
 ち しトナマレル

ねろにつくた思 三〇〇六
 とりはな之 三〇三二
 とこのへだ思に 三〇五五
 いづ思むきてか 三〇八一
 つ すトナマレル
 まつした須 二九七九
 な あトナマレル
 安せかまかさむ 二九八五
 安どかもいはむ 二九九二
 の どトナマレル
 を度のたどりが 三〇一七
 ら なトナマレル
 しほみつ奈むか 二九八二
 と奈ふべみこそ 三〇七六

わぬにこふ奈も……………三〇八二
 ぬが奈へゆけば……………同
 こふしかる奈も……………同
 ふたゆく奈もと……………三二二八
 わをかまつ那も……………三一六二
 れ　　えトナマレル
 たちみだ要……………同

附言 卷中轉訛ノ最多キハ

うべこなはわぬにこふなもたとつくのぬがなへゆけばこふしかるなも(三〇八二頁)

トイフ歌ナリ。傍書セルハ正音ナリ

(流布本卷第十二至卷第十四目錄)

萬葉集卷第十二

古今相聞往來歌類之下

正述心緒歌一百十首

寄物陳思歌一百五十首

問答歌三十六首

羈旅發思歌五十三首

悲別歌三十一首

萬葉集卷第十三

雜歌二十七首

相聞歌五十七首

問答歌十八首

譬諭歌一首

挽歌二十四首

萬葉集卷第十四

東歌

上總國雜歌一首

下總國雜歌一首

常陸國雜歌二首

信濃國雜歌一首

遠江國相聞往來歌二首

駿河國相聞往來歌五首

伊豆國相聞往來歌一首

相模國相聞往來歌十二首

武藏國相聞往來歌九首

上總國相聞往來歌二首

下總國相聞往來歌四首

常陸國相聞往來歌十首

信濃國相聞往來歌四首

上野國相聞往來歌二十二首

下野國相聞往來歌二首

陸奧國相聞往來歌三首

達江國譬喻歌一首

駿河國譬喻歌一首

相模國譬喻歌三首

上野國譬喻歌三首

陸奧國譬喻歌一首

未勘國雜歌十七首

未勘國相聞往來歌百十二首

萬葉集新考
未勘國防人歌五首
未勘國譬喻歌五首
未勘國挽歌一首

萬葉集新考

三一八八

萬葉集新考第四正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一九三四	四	最の俗字最	最の俗字最	二二九八	四	頁附フ二三九八ト誤レリ	ワガ
同	同	叢の古字叢	叢の古字叢	二三一七	四	ワガ	ワガ
一九六二	一〇	妹の	妹ノ	二二二一	一四	我ガ	我ガ
二〇〇四	九	間	間 ^ハ	二二二五	九	惜れる	借れる
二〇〇九	八	ちつき山	さつき山	二二六四	一三	千遍	千遍
二〇二六	一	ざねノ上ハあナリ	さつき山	二四一三	一三	我を	我ヲ
二〇三二	九	ミナシ河	ミナシ河	二四二九	一〇	見まほしけく	見まくほしけく
二二一七	九	チリヌレバ	チリヌルミレバ	二四七一	五	荒磯	鹿磯
二二五六	四	今日	今日	二四九三	七	吾	吾
二二七〇	一四	オモシロシト	オモシロシト	二五二〇	九	比言	此言
二二二〇	一〇	たをわすれて	をたわすれて	二五二三	一三	沼	沼
二二五二	八	スレテ	スレテ	二五二五	一	釋	譯

萬葉集新考第二及第三正誤追加

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一一〇四	二	崇神	崇峻	一四九三	九	古書ニ	古書に
一一四九	一二	高丘河内連	高丘河内連歌	一五二四	一一	云へるたり	云へるなり
一一八五	一〇	反歌	反歌二首	一五二六	七	祝詞	祝詞
一二一九	一一	雲ノ渡	雲ノ波	一六〇一	一〇	ヒロシク	ヒロヒシク
一二五七	七	サヨフケテ	ヨグタチテ	一六〇二	三	深茅	淺茅
一二六七	一三	誤としてミヅヲ	誤としてミヲヲ	一六〇九	四	穿鑿	穿鑿
一三五二	五	人と伴ハズ	人と伴ハズ	一六六二	一〇	淺芽	淺芽
一四〇一	六	第三句	第二句	一八二三	一二	爾に	爾を
一四〇八	三	ヤマニに	ヤマニと	一八三七	一三	にほひて	にほひ△テ
一四二七	一三	とへいる如し	といへる如し				

昭和三年八月五日印刷
昭和三年八月八日發行

(非賣品)

著者

井上通泰

發行者

東京市麴町區内幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
守岡功

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

發行所

東京市麴町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座二七八三番
振替東京五二二九八番



萬葉集新考
第五

IT V 69





